ファンタシースターポータブル２ ―異世界からの介入者―

リシュベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタシースターポータブル２―異世界からの介入者―

【Ｎコード】
Ｎ９４９４Ｉ

【作者名】
リシュベル

【あらすじ】
ＰＳＰのファンタシースターポータブル２を元にした二次創作です。

予告

「こりゃあ、また……変なところに出たな」

青年は時空を越え、本来接点のない世界へと舞い降りた。

「くそ、治癒がおいつかねぇ……！」

見知らぬ敵、見知らぬ世界。

「リトルウィング……軍事会社か」

青年は右も左もわからぬままとある軍事会社に入社することとなる。

「なんてたって私達は『パートナー』なんだからね！」

共に行動する事となるパートナーと名乗る少女。

「『消えゆく存在』ごときが……ほぅ、どうやら貴様は『介入者』の様だな」

世界を巻き込んで己の望みを叶えようとする者。

「人間ってのはだな、ここぞと言う時は自分が思う以上の力を出すことが出来るんだよ」

小さな事件から世界を巻き込んだ事件へと発展した物語は佳境を迎える。

「……行ってくれるか？」

「あぁ。　神崎　暁、敵拠点に潜入し目標を撃破する」

今新たな世界の物語が幕を開ける……。

予告（後書き）

はい、スイマセンまた勢いで書いてしまいました。（汗）

更新にかんしては不定期になりますw　というか見る方居るかどうかが問題な訳ですがw

個人的には前作に比べると出来が良いなと感じましたし面白かったので。

なんつうか、エミリアが良いキャラしてますw

主人公図はもうひとつの作品と兼用になりますので出来上がり次第載せられれば公開しますw

１ｓｔ　ＵＮＩＶＥＲＳＥ『始まり』（前書き）

ファンタシースターポータブル２の二次創作小説早速一話更新です。
少し描写がキツイところもありますので御了承下さい。

1st UNIVERSE『始まり』

「こりゃあまた……変なとこにでたな」

小さな粒子が集まって人の大きさになると淡い光をだしながら一人の青年が降り立った。

「なんだここ……魔界ってわけじゃないよな？」

見渡せば遺跡と思わせる作りが見受けられるが文明的レベルから言えば余程高いと思える。

「あぁ～もう！！　誰か開けてよ！！」

ふと声のする方向を見れば十代後半行くかいかないかの金髪の少女が扉に向かって叫んでいた。

「…誰？」

ちょうどいいと思い青年は声をかけようと近づいたら向こうも気づいたようだ。

「あぁそっか、閉じ込められちゃったのあたしだけじゃないんだね」

話は読めないがどうやら閉じ込められたというのは理解できた……。

「いきなり閉じ込められちゃったから、なにがなんだかわからな

いし…。　気がついたらみんな逃げ出してるし」

「スマン。　ここ何処だ？」

「……は？」

青年からでた言葉が意外なのか間の抜けた返しがきた。

「え、アンタもここの海底レリクスの調査に来たんじゃないの？
ってアンタ見かけない服着てるわね」

（レリクス？　わからん、少なくても地球ってわけじゃなさそうだが……世界を越えたか？）

「持っている武器も見たことない物だし……アンタ一体なんなの？」

思考している中少女が訝しむように目を細める。

「気がついたらここに居たからな。　世界を移動したんだな」

「『世界を移動』？　なんの話？」

「いや、気にするな。　それよりその扉開きそうにないぞ」

「そうなんだよね……はぁ、どうしよう」

「いつまでもそうしてる訳にもいかないだろ。　他をあたるしか――うぉ！？」

そう言って踵を反すと服の裾を掴まれた。

「まさか奥に進む気？」

肯定の言葉を返すと少女は高速で首を横に振った。

「無理無理、やだやだ危ないって！！　ここ未開のレリクスなんだよ、スッゴイ危ないんだよ！！」

「多少腕に自信があるから心配ない、アンタはここにいれば良い。安全を確認したら迎えに来るから」

歩を進めようとするもそれを上回る力で止められる。

「ちょっ、ちょっとまって！！一人で行っちゃうの！？」

「すぐ戻ってくるって。　それと余り引っ張るなって、伸びる」

「行くから！！あたしもいっしょに行く！！」

青年の話を聞いてか聞かずか……明らかに後者だが、同行すると声を上げる少女。

「（一人になるのがいやなのか？　……奥から敵意は感じるがそんな強い力は感じない。　しょうがないな）」

青年は辺りを警戒し気配を探るとそれほど強い力を持つ者はいないと結論し折れた。

「わかったわかった、とりあえず落ち着け」

一緒に行くと聞いて安心したのか少女は落ち着きを取り戻した。

「あ、そういえば名前、聞いてないんだけど……」

「暁、神崎　暁だ」

「カンザキ？　変わった名前ね…」

「悪い、俺のところではファミリーネームが先なんだ」

「ふ～ん、じゃあアキラが名前ね。　あたしはエミリア。　エミリア・パーシバル」

金髪の少女が名乗ったことで二人の自己紹介は終わった。

「えっと、その……これからしばらくは一緒だから……よ、よろしくね」

人見知りするのかぎこちない挨拶をするエミリア。

その後二人は出口を探すべく奥へ移動する。

＊

「あぁやっぱり原生生物がわんさかいる。　見逃して、くれないよね……」

「言葉が通じれば言ってみれば？」

「うぅ～言ってみただけじゃん！！」

暁は刀を抜き、朱い装飾銃を持つ。

「あ、あのね、直前で言うのはなんだけど。　あたしは武器はもってても戦闘経験ほとんどないの。　……だから頑張って！！　あたしは応援してあげるから！！」

「おいおい……」

土壇場でカミングアウトされもはや呆れてしまった暁。

とりあえず、先にいる緑色で腕が鎌になっている爬虫類？に向かって駆ける。

「ふッ！！」

腕を切り落とし、そのまま勢いを殺さず袈裟斬りを与える。

悲鳴を上げながら倒れる爬虫類を見ながら後ろで見ていたエミリアが感嘆した。

「すごい、流石傭兵って感じ…。　なんかホッとしたよあんたがいれば安全っぽいし。　あたしは軍事会社に登録されてるだけで戦う気とか、これっぽっちもなかったのに……だっていうのに、あのおっさんあたしが働かないからって無理矢理連れ出してこんな危険なレリクスにほっぽって……あぁなんか腹がたってきた、こんなか弱い女の子を一人にするなんてひどいと思わない？」

ここまで一気に喋り通すエミリアに暁は苦笑いを浮かべる。

「とりあえず軍事会社に所属してるんだったらそれなりに働かないといけないんじゃないか？」

「うぐ…そう言われると返しようがないけど…だからって置いて行ったりする！？」

とどのつまり、置いてけぼりをくらったのが気に食わないそうだ。

そのまま会話というエミリアの愚痴を聞きながら通路を進んで行くと奥から大きな音がきこえた。

「い、今の音何！？」

「……少なくとも喜ばしくない事は確かだな」

確認しようと先を急いでみたら奥の広間には斧らしき得物を構えた大きな機械兵士が立ちはだかっていた。

「ちょっと大型の自律起動兵器！？　なんで動きだしてるの！？」

「さぁな、とりあえずあいつをなんとかしなきゃ先に進めないってのは確かだな」

朱い装飾銃と刀を握りしめ、臨戦体制にはいる。

「……って、まさかあいつと戦う気！？」

「出口を探すにせよどの道あいつと戦わなきゃ奥にいけないぞ？」

「……うぅ、うううーっ！！」

戦いたくない気持ちと早く出口を探したいという気持ちの葛藤がエミリアの中で行われていた。

「……わかったよ、あたしも覚悟を決める。　あんたの力、信じてるからね！！」

「オーケー、なら援護は任せるよ」

暁が前に出て、エミリアが後ろで援護という形で自律起動兵器―スヴァルティア―と対峙する。

スヴァルティアは二人を確認すると、咆哮のような音声を上げた。

「はぁあッ！！」

暁が刀で斬りつけるも外殻となる鎧に弾かれる。

「…ガードが固てぇな」

「こいつらは封印戦争のときにＳＥＥＤに対抗する尖兵として作られたらしいの、だから頑丈なのよ！！　反撃くるよ！！」

用語を使われるとイマイチ、ピンとこないがＳＥＥＤとは敵勢力だろう。　暁はそんな事を考えながらも振り下ろされる斧をかわす。

「お～すげぇ。　元気があるとはいいことだ。　てか有り余って

る？」

振り下ろされた地点をみると斧が床を砕きめり込んでいた。

「なに余裕こいてんのよぉッ！！」

軽口を叩いたら離れているエミリアからつっこまれた。

「エミリア、一瞬だけ注意反らしてくれ。　一撃で決める」

一瞬だけ嫌な顔が見えたが意を決したのか頷いた。

「数撃ちゃ当たる！！」

エミリアの手に粒子が集まり電撃の矢となりスヴァルティアを襲う。

「……」

他者から攻撃によりそちらに敵意を向ける。　しかしその為、暁のタメの時間を得ることが出来た。

違和感を察知したのか直ぐさま暁に振り向き直るが――。

「気づくのおせぇよ」

瞬間魔力を溜めた銃撃を頭に撃ち込んだ。

頭部を撃ち抜かれたスヴァルティアは音を立てて仰向けに倒れ込んだ。

「……やった、やったよ！！　あんなでっかいの倒しちゃったよ！！　すごい、ほんとにすごい！！　あんたを信じてよかった、やったぁ！！」

歓喜といえる表現を身体いっぱいつかって表現する。

「そんな褒めることのものじゃないぞ、奥に行くぞ」

「あ、ちょっと。待ちなさいよ～！」

暁がさっさと先に行くので後を追うように走る。

――ギィ。

「！？」

なにかが軋む音。　そう、金属と金属が擦れた時の音だ。

「？」

エミリアが背後に気配を感じ振り返ると、倒したはずのスヴァルティアが頭部を失いながらも再び動きだした。　しかもエミリアに爪を振り下ろそうとしていた。

「エミリア！！」

直感的にヤバイと感じ刀を構え地を駆ける。

「きゃあああッ！！」

振り下ろされる凶爪に避けることは出来ないと確信した暁はエミリアを突き飛ばした。

そうなると降り懸かる凶爪の対象は暁となる。

――ザシュ…

「え？」

肉を切り裂く音。　それが自分のものではないと気づき振り向く。

「……いやぁああ！！」

視界にはスヴァルティアの凶爪を受け盛大に噴く赤い飛沫。それは暁の身体から噴き出していた。

「……く！！」

苦痛の表情を浮かべる暁だが、魔力を付加した刀で渾身の一撃を加える。

「ウラァア！！」

真一文字に胴体を斬り裂かれたスヴァルティアは火花を散らしながら倒れ、今度こそ活動停止した。

「く…、くそ。　治癒が追い付かねぇ…」

仰向けに倒れる暁、しかしその胴体には三本の右肩から左脇腹に

かけての斬り傷が走っていた。　倒れてから間もないというのに赤い水溜まりが出来てきた事から相当な出血だということがわかる、これはもう致命傷の域だ。

「あんた、なんであたしなんか庇って……」

駆け寄ってきたエミリアが涙を浮かべながら覗き込んできた。

「なんでって…理由がいるのか？」

段々と意識が薄れて行く中、暁はエミリアに返す。

「それと、少し寝かせてくれ。　治療に専念するから」

「馬鹿！！　この傷でどうやって治療するのよ！？」

暁は今回と同じような傷を負ったことがある、一時的に昏睡状態に陥るがそれは治療に専念するものだ。　この意識が薄れていくのも自己再生能力を高める前触れなのだ。

（説明する時間も無いんだよ……）

暁が眼をつむり意識を手放した。

「……ねぇ、眼を開けてよ…。　開けてよ！！」

暁の身体を揺さ振るが反応はない。　エミリアの表情がどんどん悲痛な色にかわっていく。

「どうしてみんなあたしの前からいなくなっちゃうの！？　お

願いだから眼を開けてよ！！　誰か、誰でも良いから――――」

淡い光がエミリアの身体を包む。　その光は輝きを増して行き……。

「助けてよぉーーー！！」

叫ぶと同時に広間は光に包まれた。

2nd UNIVERSE『計画』（前書き）

随分と放置してました。汗

ネタ作りとリテラエルネルアのキャラ作成にとあと……神喰いやらNextやらにゲフンゲフン！！

前置きはともかく、それでは第二話をどうぞ！！

2nd UNIVERSE『計画』

俺がこの世界に来て二日が経った。

一先ず身辺報告でもしておこう。

まずは俺、神崎　暁は成り行きで軍事会社に入る事になった。

いきさつはあのあと救助に来たのがその軍事会社の者だったらしく同業者の救出ついでに俺も救出したという話らしい。

しかも軍事会社に入らないかと勧誘が来たが当然断った。　が。

『ウチも慈善事業してるわけじゃねえから料金を払ってもらわなくちゃな』と、切り返された。　生憎だがこの世界の通貨を持っているわけではないため渋々入社を余儀なくされた。

「リトルウィング……軍事会社、か」

宛がわれた部屋のベッドに寝転びながら俺は考えていた。

まず窓の外、暗い空間に数多の星が輝いている。　勘違いしないで欲しい、それは夜ではなく『宇宙空間』だ。

俺の世界にも宇宙進出とかのニュースは流れるが実際に人が住める状態には至っていない。

それなのに俺はこうして宇宙空間の施設、コロニーと総称されるところにいる。　元の世界の皆さん一足どころじゃないがお先に宇

宙空間の生活を味わっています。

重力制御があるのか身体が浮かないのでここが宇宙空間という実感がない。

「とりあえず情報収集だな、世界事情知らないと面倒そうだし」

都合が良いのか言語や文字が同じで助かった。

端末もホログラム表示以外ならほとんどパソコンと変わらない。

俺がいるこのコロニー、『クラッド６』というのはリゾートコロニーでスカイクラッド社という親会社を持つ子会社だ。

事業拡大のため軍事会社を設立しこのクラッド６を拠点としているようだ。

そして世界。　どうやら四つの種族が共存しているらしい。

俺と同じ種族『ヒューマン』。　苛酷な環境下での生活に適した種族『ビースト』。　何処かしら和風を感じさせる『ニューマン』。

そして機械生命体の『キャスト』。

この四種族はなんと５００年の歳月を争っていたというから驚きだ、やはり世界が変わっても戦争というのは無くならないな。

まぁ戦争なくして発展はなしというのは皮肉な話しだ。

「ふーん、今更そんな世界事情を勉強してるなんて、疎いのね」

不意に背後から放たれる声に振り向く、金髪に女子高生制服風な服装のエミリアがニヤニヤと悪魔的な笑みを浮かべこちらを見ていた。

なんでコイツがここに居るんだ？　招き入れた覚えはないんだが……。

「鍵が開いてたからお邪魔します～って入って来たのよ」

「おいこら、俺は許可した覚えはないぞ」

「え～、いいじゃんよ～」

俺の言い分を聞かずにエミリアはベッドに横になる

「……俺は男だぞ、それも二十歳だ。　そんな年頃の男の部屋に勝手に入るな」

「……くかぁ～」

「……」

冗談だろ…？　コイツ、マジ眠りに入ったぞ…。

「……外に行くか」

このまま居たらあらぬ誤解を受けそうだからな、エミリアが起きるまで時間潰すか。

《待って……》

部屋の外に出ようと扉に向かうが誰かの声に呼び止められる。

「……エミリア？」

後ろを振り返ると虚ろな瞳のエミリアが立っていた。

いや、姿はエミリアだがこの気配は別人だ。

「誰だ、お前？」

《ここなら二人で話しができそうだから…》

そういったエミリアから光が漏れ、前に女性の姿が形どられた。

光がでたあとエミリアはベッドに倒れた。

金髪におしとやかそうな性格をしているが際立つのはその後ろにある飾りらしき物と露出度が高い服装、鼻腔をつく心地よい香り。

「……これはテティの花？」

《この匂いがわかるなんて……あなたは何者なんですか》

「それは俺のセリフだ、テティの花はある世界で一部にしか咲かない希少な植物だ」

もちろん魔界にな。

《まさか貴方、『干渉者』ですか？》

「……生憎だがその『干渉者』ってのは心当たりないな、俺はある事故でこの世界に来たに過ぎない。　だがこの世界に来たということは何かしら理由があるのは確かだ」

世界を移動したら大概巻き込まれるからな。　それより――

「そういえばあんた、俺が寝てる時に聞こえた声の主か？」

《はい、そうです》

やはりそうか、《貴方を死なせはしません！》って聞こえたのは幻聴じゃなかったのか。

「ならこの傷が早く癒えたのはあんたのお陰か」

傷を負った箇所に手をなぞる。　先程確認したが見事に傷が癒え、痕が残っていなかった。

《記憶があるのですね、それなら話しが早いです。　貴方はあの時、一度死にました…》

「あ～治してもらっておいて悪いんだがあの傷だとまだまだ死なない。　俺は普通の人間……ヒューマンか、じゃないんだ」

《……ではあなたは何者なんですか？》

「ま、別世界から迷い込んだ別世界人ってだけでも覚えといてくれ。　それで？　あんたこそ一体何者なんだ？」

流石に悪魔だって言っても信じないし、証明しようがないからな

話しをかえておこう。

《私の自己紹介がまだでしたね。　私はミカ、訳あってこの子に宿る意識のみの存在です。　いまのこの姿も、状態も、既に失われた古の技術によるもの、いわゆる旧文明、私は旧文明人になりますね》

「意識体……か。　エミリアは大丈夫なのか？」

寝息を立てているエミリアをみる。

《疲れていたのでしょうね、今は浅い睡眠状態にあります。　心配せずとも、すぐに目を覚ましますよ。　私はエミリアが安らいでいるほんのわずかな時間だけ、この身体をお借りしているだけです》

身体を借りてるといってもアンタいま精神体で現れてるんだろう。

《この些細な時間で構いません…どうか私の話しを聞いてください》

「断ると後味悪いしな…、話ってのは？」

《この時代の背景等はエミリアの記憶から把握しました》

そこから、ミカの話しをきいていく内にミカ達旧文明人達による計画を聞かされた。

「精神体の旧文明人が今の『人間』の身体を奪い復活する……ねぇ。　なんとまぁ途方のない年月をかけた計画だな。　暇人共め」

その計画を聞き少なからず嫌悪感を抱いた。

《今、このグラールは…、旧文明人の生み出した罠に狙われているのです。　突拍子もない話とお思いでしょう、ですがいずれも事実なのです。　どうかこの忌まわしい計画を阻止するために手を貸していただけないでしょうか？　この子は心を閉ざしきっていて私の声を認識してくれないのです》

エミリアが心を閉ざしてる？　なんかあったのか…？

「…一つ聞かせてくれ」

《なんでしょう》

「ミカは自分が旧文明人だと言ったが何故計画を阻止しようとする？」

《確かに私は旧文明人ですが現代への回帰を望んではいません。私達は滅ぶべくしてほろんだ。　世界は次の世代に任せるべきなのです》

「じゃあ俺がこの世界にきた理由はそこにあるのか」

ミカの返答にこの世界にたどり着いた理由を納得する。

「ふぁ……」

《そろそろこの子が目を覚ます。　詳しくはまたいずれ……》

そういってミカの姿は光に変えエミリアに吸い込まれていった。

「ん～……ちょっと寝ちゃった、かな？」

「……ちょっと所じゃない。　爆睡してたぞ」

「ちょ！？　寝てるのに気がついてたんだったら起こしてよ！！　あ～、恥ずかしい……」

寝顔見られて恥ずかしいと思うならまず男の部屋で寝るな。

とりあえずミカはエミリアが心を閉ざしていて自分の存在を認識していないといった。　てことは寝てる間に起こった（ミカが出て来ている間の）出来事は覚えてないだろう。

それからエミリアを世界事情やら談話をしてこの世界の情報を得ていった。

途中で「私ばっかり話するのもあれだからアンタも話してよ、何てったって私たちは『パートナー』なんだからね」と言われ、渋々自分の事をある程度話した。

フリーのハンターとして世界を巡っていて、気が付いたらあのレリクスに居た、と。

3rd universe「予兆」（前書き）

震災後初の投稿をさせていただきます。この度は被災された皆様及びその御家族様に置かれましては心よりお見舞い申し上げます。

原発問題も解決し一日も早い復興をお祈りします。

福島には縁がありますので今回の災害には酷く痛感いたします。

どうか気を強く持ち復興に向けて頑張ってください。

3rd universe「予兆」

「もぉ〜！！　一体どこまで行く気なのよ！？」

「どこまでって忘れてないか？　エミリアの特訓の為に来てるんだぞ？」

「う…」

さて、俺とエミリアはエミリアの特訓の為社用の船を使ってパルムに来ていた。

「け、けどさ何もこんな僻地まで来なくても良いと思うんだけど」

見渡せば自然溢れる場所だ。　しかし世情を調べたところＳＥＥＤ事件の時に、ここの区域は浸蝕され一時焼け野原だったらしい。

ＳＥＥＤと言うのは端的に言うなら異形の総称だ。

今は人工でありながらもここまで自然を醸し出している。　いくら人工でも年月が経てば自然に近くなる。

「手っ取り早く実力をつけるには荒療治だが実戦だ、エミリアは経験が無いだけで筋は良いはずだ」

一先ず説明をするといいタイミングで敵意がこちらに向けられている気配を感じた。

「――おっと、ちょうど良いときに出て来たぞ」

「うそぉ！？」

茂みから現れたのは体長１Ｍも満たない小さな原生生物だった。

「か、かわいい……」

「一応パルムの原生生物ポルティだっけかな、最初はこいつを相手にセイバーとハンドガンで腕試しだ」

「え、こんなかわいい原生生物を倒せっていうの！？」

「まぁかわいい外見とは裏腹に」

ポルティから零れた魔力の波を感じた。　この世界に魔力という概念は無く変わりにフォトンというのがあるのだが……魔力でいいだろ。

「え？」

下から赤と青の陣が現れポルティ達を包む。

「補助テクニックをかけ攻撃して来るぞ」

「きゃああ！？」

俺の言葉が合図になったのかポルティ達はそれぞれ大きくジャンプしてエミリアに迫っていく。　それに対しエミリアはセイバーとハンドガンをてに悲鳴を上げた。俺は近くの樹の枝の上に飛び上がり成り行きを見守る。

「ただそこまで威力あるわけじゃないから肩慣らしにはちょうど良いだ「説明はいらないから手伝いなさいよ―ッ！！」俺が手を出したら意味ないから一人で頑張れ～」

（ ∀｀）ノシ

「なんかその笑顔がものスッゴいムカつくんですけどッッッ！！」

ナイスな突っ込みだ。

「パートナーの力を信用しているからこその判断だ」

「パートナーって今日なったばっかじゃない！！」

「いろいろツッコミを入れる余裕あるなら大丈夫だな」

エミリアはこっちに突っ込みを入れながらもセイバーを振り回し、ハンドガンの引き金を引く。

「ツッコミを入れないとやってられないのよ！！」

「はっはっは」

「こんちくしょ――――ッ！！」

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ…」
「あのくらいでへばったのか？」

ポルティとの戦闘を開始して約１０分強、エミリアは肩で息をしていた。

「アンタのせいよ！」
「ふむ…、俺はエミリアに何かやった覚えは無いんだがな」
「十分してるわよ…！」

大丈夫、自覚はある。　敢えて言わないが。

「さて、奥に行くか」

「え、もう！？　少し休ませてよ！」

「歩きながら休憩は出来るさ、それに少しパルムに滞在するから食料も調達しなきゃ飯抜きになるぞ」

「え、滞在って……マジ？」

「大マジ、集中的にやったほうが体が覚えるもんだ。　俺の場合はサバイバルしながらやってたし」

「アンタと一緒にしないでよ！！」

「いやいや、一緒にはしてないぞ。　少なくても一人で放り出されないだけマシだな」

「……ちなみに聞くけどそれどのくらいの期間やったの？」

「一ヶ月ぐらいかな？」

「一ヶ月！？」

「俺が１３の時だったからなぁ、がむしゃらだったぞ。　おかげで地盤が出来上がったぞ？　安心しろ、多く見積もって明々後日まで滞在予定だ」

「よかった～…」

「『多くて』だがな。　エミリアの実力次第で明日か明後日には戻るぞ」

「ほんと！？」

「ああ」

「よぉし！！」

袖をを捲くる仕種をして気合いを十分に入れたようだ。　何というかおだてればやる気になるタイプなようだな。

さぁてお次は――

「！？」

「な、なによ……まさかアンタあたしの身体が目的でこんなところに連れてきたわけじゃないでしょうね！？」

なんだこの嫌な気配…さっきまでこんな気配しなかったぞ。

「……アキラ？」

気配からして相当な大きさだ、しかもこっちに真っ直ぐ向かって来ている？

「エミリア下がれ」

「え、なに？」

やばい、間に合わん！！

「ちぃ、少し我慢しろよ！！」

俺はエミリアを抱えその場から離れる。

「え、ちょ、キャアアアッ！？」

すると俺達が居た場所に風切り音とともに巨体が落ちてきて轟音と砂埃を巻き上げた。

「な、なに！？」

状況が飲み込めない中、抱えられたエミリアはその砂埃を凝視する。

【ギァアアア！！】

風が吹き砂埃が晴れるとそこにはドラゴンが居た。

「な、なんなのアイツ！？」

まぁいきなりドラゴンが来たら驚くわな。　俺も面食らったわ。

「ディ・ラガン！？　けど通常のラガン種じゃない、こんなのみたことない！？」

なんだ、知ってるってことは原生生物か？

「なら新種じゃないのか？　良いねぇこれを発表すればノーベル賞物だ」

「ノーベル賞？」

こっちはノーベル賞なんてないのか、まぁ当たり前か。

「コイツの相手は俺がやる。　エミリアは巻き込まれないよう隠れてろ」

今のエミリアには荷が重い。　俺はエミリアに言い残すとそのディ・ラガンの前にいく。

「まさかドラゴン種とやるとは夢にも思わなかったな…。　まぁいい」

アネモネとアグニを構え。

「蹴散らす！　Ｌｅｔ' ｓ　ｒｏｃｋ！！」

ドラゴンに向かって地を蹴った。

ドラゴンは俺を敵と認識するとブレスを吐き出してきた。

「鈍いわぁ！」

俺は身を捻り、ブレスの下を潜るように滑る。

そのまま脚に三回ほど斬りかかる。　するとドラゴンの足が俺を押し潰さんと上がった。

体勢を直しそこから離れアグニに魔力を流し形成した弾を同じ脚に放つ。

弾はそのまま狙い通りの箇所に当たり刹那。

バァンッ！！

【ギィアァァアッ！！】

爆発と共に上がる悲鳴。その声量は大気を揺るがすほどだ。

態勢を崩し倒れ込むドラゴン。

俺はアネモネとアグニを仕舞い、ナノトランスからスヴァルティアトマホークを取り出し構える。

これは目が覚めた後、クラウチから渡された物だ。
スヴァルティアトマホークを担ぐように振りかぶり腰を捻りながら低くし力を溜める。
「デェェッドォ……――――」
十分に力を溜めた後ドラゴンに向かって跳躍。
「エンドォッ！！！」
頭部に向かって全体重とスヴァルティアトマホークの重さ、跳躍した分の加速力を加え振り下ろした。
頭蓋骨を叩き割る音と何かが潰れる音が周囲に響き渡る。
ドラゴンは大きく痙攣すると翼も足も力無く地面に垂れた。
「ア…アキラ？」
ドラゴンが動かなくなり勝負は決したと思ったのかエミリアが出て来た。
「倒したの？」
「あぁ。　エミリアさっきコイツは見たことないって言ったよな？」
「あ、うん。　このドラゴンはディ・ラガンって言ってここパル

ムの生物なんだけど…、ここまで変異しているのは見たことも聞いたこともないのよ」

「突然変異って可能性は？」

エミリアに聞くと首を傾げ思考に耽る。

「強いて可能性を挙げるなら突然変異ってのが有力な線かな。最近になって突然変異って単語がよく耳に入るから」

なるほど…。

ふとドラゴンに目をやると、そこでハッとした。

まだ気配が消えていない！！

俺はエミリアを背中に回し護るように立つ。

「え？　今度は何！？」

エミリアがうろたえる中俺はスヴァルティアトマホークを構える。

「……」

しかし気配はするともドラゴンが動き出す様子はない。

訝しみながらドラゴンを見ると気配の出所がドラゴンの体の中から発せられてるのを知った。

「エミリア少し向こう向いてろ」

「え？　な、何するのよ」

「いいから」

「もう、なんなのよ～」

有無言わさず後ろを向かせこちらを見ないようにする。

さて、と。

俺はドラゴンに近づき、出所を特定するため意識を集中する。

――――……ふむ、ここか。

場所を特定するとスヴァルティアトマホークをナノトランスに仕舞い。アネモネを取り出す。

「ふっ！！」

一閃し、部位を切り開く。

すると一層気配が明確に発せられた。

「ビンゴ」

さらに肉を掻き分けて探ると人の頭ほどの大きさの結晶体が見つかった。

コイツか、…某ゲームの紅玉みたいなレア素材ってなわけないな。

しかしまぁおかしな結晶だ。

「それはあまり触らないほうがいいかと思いますが」

「ん？」

後ろから声が聞こえたので振り向くと――

「エミリア？　いやミカって言ったか」

「はい、ミカです」

「んで？　これが何なのかわかるのか？」

「それは……その前にＳＥＥＤの事は知ってますね？」

ＳＥＥＤ、確か何年か前にこの世界、グラールに現れた異形の総称。

「かい摘まんだ知識だがな」

「その中で一際凶悪なＳＥＥＤが『ダーク・ファルス』と言うのですが、その気配がこの結晶体から感じます。　なぜこのようなところにあるのかは謎ですが…」

「じゃあ、このドラゴンが突然変異したのはコイツが原因ってか？」

「恐らくは。　この子の記憶から最近耳にする突然変異もこれが

原因かも知れないですね、憶測ですが」

ふーん。　ん？　確かＳＥＥＤが襲来したのは近年じゃなかったのか？

「なぁミカ」

「はい？」

「旧文明の時代にもＳＥＥＤって居たのか？」

「居たなんてものじゃないですよ、あれは私達の時代でも脅威でしたからね。　それ故に旧文明人が滅ぶ原因にもなり、結果先程お話した旧文明人の計画になる要因にもなります」

……ふむ、ＳＥＥＤか。少し詳しいデータを探す必要があるな。

「そこの貴方」

「「？」」

ミカと話していると声をかけられた。

声のする方を二人で振り向くと―――。

「ここはＧＲＭ社の私有地ですよ？　何をしてらっしゃるのですか？」

血色の悪そうな男性がこちらを見ていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9494i/

ファンタシースターポータブル２―異世界からの介入者―

2011年5月4日17時03分発行